

# 岩手県大槌町での活動報告

東日本大震災と津波から6ヶ月が経過しました。当会では、岩手県大槌町での支援活動を現在も継続中です。最新の現地の様子と活動についてご報告します。

## 仮設住宅へ

大槌町では8月11日ですべての避難所が閉鎖され、被災者の方々は「仮設住宅」へ移り、新しい生活が始まりました。しかしメディアでも報じられているように、仮設住宅には様々な問題があつて、手放しでは喜べない状態です。特に、仮設への入居が抽選で決まったために、これまで何とか保たれていた地域ごとの絆が分断され、山間部や辺鄙な土地に仮設が建てられているために、買い物や通院に非常に不自由するといった状況です。よく言われているように、高齢者(特に男性)の引きこもりが危惧されていますし、子どもたちも新しい環境に喜びだけでなく戸惑いを持っているように見受けられました。



## 子ども支援

町の将来は、子育てが安心して出来て、子どもたちが地域に留まれるかどうかにかかっているといっても過言ではありません。当会では仮設団地で「ちびっ子広場」という遊びの活動を実施しています。しかし、仮設団地は大槌町だけでも48箇所 に点在し、すべての団地で子ども向けの活動を実施するのは非常に困難です。また子ども向けの活動はとり

わけ継続性が大事なので、できるだけ集中した活動が求められています。



大槌では、小学校は5校のうち4校が被災、中学校は2校のうち1校が被災しました。現在、隣町に間借りしている小学校1校と、残った小学校に仮住まいしている小学校3校、また他の学校に間借りしている中学校が全て、9月末には1箇所にとまとめられた「仮設学校」に移ることに なっていますが、被災した子どもたちにとっては、通学バスによる長距離通学やプレハブの学校も心理的なストレスになっています。そこで、仮設学校のそばに児童館を造って、子どもたちがのびのびと遊ぶ居場所作りを計画中です。児童館では、小中学生だけでなく、乳幼児とお母さんの子育て支援も想定しています。

## 地域自立のために

当会では仮設住宅全2100戸に地元で製造した下駄箱と電子レンジ台を寄贈したほか、やはり地元で作ったベンチを団地ごとに設置していく予定です。仮設団地といっても様々なサイズがあり、広すぎて敷地内を歩いて移動するのも大変なところから、遊ぶスペースもないところまであります。

各地区の状況に合わせ、居住している方々と相談しながら地域的な支援をすることで、隣近所の付き合いが生まれ、それが新たな地域の絆作りになればと思います。現在「手仕事カフェ」や、将棋、伝統食、凧揚げ、ベンチの色塗り、木工製品の物産化など様々な試行錯誤をしながら、地域で安心して生活していける関係作り、収入作りのお手伝いをしたいと考えています。

また、拾得した写真やアルバムは、それぞれ数万枚、数千冊が整理され、返却のための写真展も継続しています。これまで1500人以上の方に返却してきました。



厳しい冬に向けて、ニーズにあった支援がますます必要になっています。地元住民の方々と一緒に、しばらく東北での活動を続ける予定です。